

秋田大学教育文化学部研究紀要
人文・社会科学第75集別刷 令和2年3月

用法が変容・拡大しつつある方言文法の世代的な実態について

—— 秋田方言の格助詞サ・ドコ，可能表現 ——

大 橋 純 一

On the Intergenerational Reality of Dialect Grammatical Features which
are Subject to Change and Expanding Usage: The Case Particles Sa and
Doko and Expressions of Possibility in the Akita Dialect

OHASHI, Junichi

用法が変容・拡大しつつある方言文法の世代的な実態について

—— 秋田方言の格助詞サ・ドコ，可能表現 ——

大橋 純一

On the Intergenerational Reality of Dialect Grammatical Features which are Subject to Change and Expanding Usage: The Case Particles Sa and Doko and Expressions of Possibility in the Akita Dialect

OHASHI, Junichi

Abstract

This article examines the grammatical features of the Akita dialect, which has been identified as undergoing change and expansion in its usage. Specifically, the following three phenomena were examined: (1) The case particle sa, which indicates the direction and destination of movements; (2) The case particle doko, which indicates the object; and (3) expressions of possibility. This article attempts to clarify the specific dynamics of the above features using field surveys targeting younger, middle-aged, and older people. The analysis revealed the following points in relation to each grammatical feature. (1) As the ages of respondents decreased from older to younger, there was a remarkable growth in the range of expressions used, especially in indicating movement, change and direction. However, there were three stages to this growth: the establishment stage; the transitional stage; and the emergent stage. (2) The rules for usage of doko were retained in older people, relating to whether the object is sentient or non-sentient, whereas younger people have not retained most of these rules, and middle-aged people exhibited an intermediate status in this regard. (3) The application of verb forms of potential to potential situations was observed in the elderly group, with some partial violations of these rules, whereas in the middle-aged group there was a transitional growth of confusion in relation to expressions of capability, and the whole system for making such expressions was becoming less clear. Almost all of these forms had become irregular in their usage among the younger group.

Key Words : Akita dialect, dialect grammar, change and expanding, case particles Sa and Doko, expressions of possibility

キーワード : 秋田方言, 方言文法, 変容・拡大, 格助詞サ・ドコ, 可能表現

はじめに

本稿では、方言文法において、その用法が世代を下って変容・拡大しつつある現象を報告する。具体的には秋田方言の3世代を対象に、(1) 移動の方向・着点を表す格助詞サ、(2) 目的語（動作または知覚・感情の対象）を表示する格助詞ドコ、(3) 可能表現（能力可能／状況可能）の3つを取り上げる。

(1) (2) については既に日高水穂（2004）（2005）において、地域差を含めた詳細な実態（いわゆる文法化の地域差）が報告されている。また (3) についても日高水穂編（1999）により、大学生世代の変容の実態が明らかにされている。本稿は、それらを参考に、筆者が担当する「特定地域研究ゼミ」（2016・2018年度）^{※1}で行った上記3項目に関する調査に基づき、各事象の現状を報告

するものである。

(1) に関しては、格助詞サの使用が具体的にどう拡大しつつあるのか。特に日本海沿岸地域に存在の場所を表すサの用法が派生的にみとめられること、またそれとも関わって、“移動性の関与”という制約がこの地域では弱い傾向にあることがうかがえるが（『方言文法全国地図1』1989、日高水穂2005ほか）、これに類する制約の拡張が現在、世代を通じてどの程度許容されつつあるのかに注目する。

(2) に関しても、同様に拡張の事態に注目する。秋田方言は元来、有情物目的語に格助詞ドコが現れ（ex. 「太郎が次郎 ドコ 殴った」）、非情物目的語では省略形に現れる（ex. 「太郎が石 φ 蹴った」）という規則を有するが、それが一部曖昧化し、後者でもドコの使用がみとめられる傾向にあるという（日高水穂2004・2006ほか）。ここ

では、その動きが世代を通じてどの程度拡大しているかの調査結果を示す。

(3) に関しては、当方言の可能表現、つまりは能力可能 (ex. 「(もう大きいので) 字書ゲル」 / 「(まだ小さいので) 字書ゲネ」) と状況可能 (ex. 「(暇なので) 手紙書グニイ」 / 「(暗いので) 手紙書ガレネ」) による使い分けの規則が、世代別に見てどう変容しつつあるのかに注目する。日高水穂編 (1999) によれば、調査当時の大学生の中にも能力・状況可能を区別する層がある一方、スルニイ形 (状況可能・肯定) の使用率自体はそれほど高いものではないこと、また全体としては「可能動詞一本化」(p.42) への道をたどりつつあることがうかがえる。本調査では、そのことを念頭に、当方言における実際の動きを高・中年層を含めた3世代の実態を通して確認する。

1. 調査

上記の (1) ~ (3) については、まずはじめに秋田市・男鹿市・五城目町において、音韻・アクセント・語彙・文法に関する体系的な実地調査 (上述の「特定地域研究ゼミ」<2016・2018年度>調査) を行い、その中の該当項目から、それぞれ若年層3名、中年層5名、高年層20名の実態を把握した。次に同調査票より (1) ~ (3) に該当する項目を抽出し、専用の調査票を作成。各年層ともに対象が30名となるよう、補足の2次調査 (若年層27名、中年層25名、高年層10名) を行った。なおここでいう若・中・高年層とは、実質的には秋田大学生、その親世代、祖父母世代であり、おおよそ20代前半、40~50代、70~80代がそれらに相当する。日高水穂 (2004) (2005) によれば、秋田県内でも各事象の変容・拡大に地域差のあることがうかがえるが、ここでは一定のデータ数から世代差を大局的に見ることに主眼を置

き、対象者は広く秋田県出身者とする。性別も特に問わない。また2次調査は一部を除き、^{注2} 基本的には筆者もしくはゼミ受講生が話者に直接対面して使用の有無を尋ねる形をとり、できるだけ1次調査の場合との齟齬が生じないように配慮した。

2. 格助詞サ

調査は、以下の21の用法について、「言える・言われて違和感がない」か「言えない・言われると違和感がある」かのいずれかを判断してもらった形で行った。各選択肢の「~違和感がない/ある」は、「自分は普段言わないが…」といったタイプの回答を捨てることを意図してのものである。サの使用の有無に関しては、ここでは「言われて違和感がない」と回答されたものについても“有”とカウントして処理するものとする (3節・4節も同様)。^{注3}

- ①移動の方向：学校に行く ②移動の着点：秋田駅に着いた ③移動の目的 (動詞接続)：花火を見に行行った ④移動の目的 (名詞接続)：仕事に行行った ⑤変化の結果1：息子が大工になった ⑥変化の結果2：午後から雪に変わった ⑦存在の場所 (有情)：今日は1日中家にいる ⑧存在の場所 (無情)：本が机の上にある ⑨相手 (着点)：太郎に話しかける ⑩相手 (起点1)：太郎に本をもらった ⑪相手 (起点2)：息子に手伝いに来てもらった ⑫役割：娘を嫁にやる ⑬比況：車がおもちゃに見える ⑭時：5時に起きる ⑮副詞の一部：あおむけに倒れる ⑯ヲ格1：ゆでたまごを作った ⑰ヲ格2：ここを掘ってみる ⑱ヲ格3：廊下を走るな ⑲ガ格1：犬が吠えている ⑳ガ格2：空が青い ㉑ガ格3：どこが痛いのか?

以下、調査結果を図1に示す。図は上記の①~⑳の用

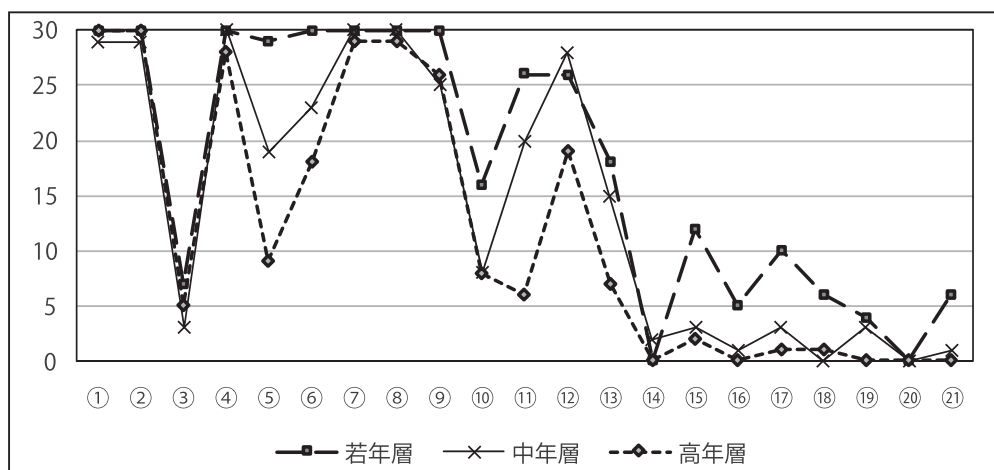


図1 格助詞サの用法

法について、それぞれ言える（違和感がない）と回答した話者の人数を実数で示している（これ以降の図も同様）。

これによると、まず①②④⑦⑧の5つ、つまりは移動の方向・着点、移動の目的（名詞接続）、存在の場所（有情・無情）の各用法において、3世代がほぼ例外なくサを使用する。^{注4} いずれも何がしか移動の視点が関与する用法、または「はじめに」にも述べたように、日本海沿岸地域に特立する派生的用法に当たるものであり、当方言のサの使用が、世代を通じてまさにそれらしく現れていることがわかる。

以上に加え、折れ線の①～⑬にかけての推移が象徴するように、主として移動の視点が伴うものにおいて、用法の拡大が顕著である（それと対照していえば、⑭～⑳のような、主としてヲ格やガ格の意味領域を担うものに対しては、未だその動きが十分であるとは見がたい）。ただし同じ移動性の用法であっても、たとえば④移動の目的（名詞接続）に対する③同（動詞接続）の実態、あるいは⑤変化の結果1と⑥同2、⑩相手（起点1）と⑪同（起点2）に見られる傾向の相違など、接続の形態や用いる文例により、拡大の許容幅が必ずしも一律とはいえないことには注意が必要である。中でも③（動詞接続：

「花火を見に行った」）などは、日高水穂（2005）の大学生アンケート（1998・1999・2001年調査）で20%弱の使用率であったものが、約20年を経た本調査の若年層でもほとんど差が見られないものの一例であるし、⑤と⑥に現れるような差も、おそらくは変化結果の明瞭さの度合いがサの使用に影響してのことだと思われる（参照、日高水穂編1999）。^{注5} つまり当方言においては、「移動性の関与」を主たる要件として、用法の拡大がのべつ幕なしに展開しているわけではないことがうかがえる。

しかし一方、当方言の動きを大局的に捉えれば、やはり統一して拡大の傾向にあることには相違ない。それは、特に高年層よりは中年層、さらには若年層と、いずれの用法に関しても、おおよそ下の世代が上の世代を上回って折れ線の比率を推移させていることからいえる。要は共通語化など、通常各方言で生じているような世代差とは対極をなす動きであり、サが持つ本来の意味が、世代を下ってその適用範囲を徐々に拡大しつつある姿と捉えられる。

ただしよく見ると、その拡大にも大きく分けて次の3タイプのあることが読み取れる。それを図2に一部例示し、視覚的に対照してみる。

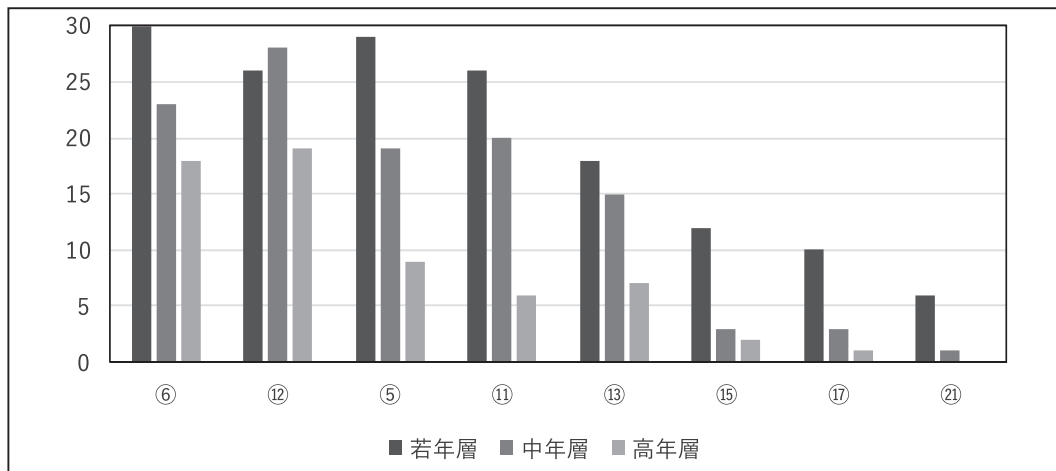


図2 段階別に見た格助詞サの用法の拡大

すると、まずひとつは⑥⑫など、3世代がこぞって高い使用率に現れ、既に高年層段階で拡大傾向にあったものが、そのままその下の世代へと伸張・徹底したタイプが抽出される。つまり「午後から雪に変わった（⑥）」のような変化結果を示すもの、または「娘を嫁にやる（⑫）」のようなある役割を表すものがそれであり、相対的に見て、これらは拡大の「定着段階」と位置づけることができる。またそれに準じるのが⑤⑪⑬である。この三者に特徴なのは、対象とする3世代に呼応して階段状の拡大が見られることである。つまり前タイプのものよりは一歩遅れをとりつつも、高～若年層へと漸次的かつ

着実な伸長を呈しているという点で、拡大の「過渡的段階」とすることができる。図2の範囲でいえば、「息子が大工になった（⑤）」、「息子に手伝いに来てもらった（⑪）」、「車がおもちゃに見える（⑬）」のような例がそれに当たる。そして以上からさらに後行するのが⑮⑰⑱である。棒線の伸びが全般に低調であることからしても前2者とは明らかに異質であるが、ここでさらに注目されるのが、高・中年層ではほとんど使用が確認されない中、若年層となってそれが急伸しているように見えることである。つまり上位世代からの拡大の一環でこの実態があるとは見なされず、当世代独自の感覚や認識の中で、

新しく用法が拡大していると受けとれるものである。これに該当するもの、「あおむけに倒れる (⑮)」、「ここを掘ってみる (⑰)」、「どこが痛いのか? (⑳)」等々、副詞の一部やヲ格・ガ格相当の例に限定されており、新しい意味領域を新しい世代が許容しつつあるという点で、これらは拡大の「萌芽段階」と見るのが適当である。

さて以上からすると、上記の3タイプは今後さらに使用が拡大し、一般にいわれる「文法化」の動きが、上記のような移動・変化・方向性のものを中心に加速していくことが予測できる。中でもおおよそどの用法に関しても、若年層という若い世代に拡大の最大値があることは、以上のことを大いに想像させるものであるといえる。しかし、図2における⑮～㉑のタイプについては、少しその今後を注視する必要があるようにも思う。というのも、これらは図においてこそ20～40%程度の使用率(若年層)であるが、各用法で実際に「言える(違和感がない)」と回答するのはほぼ同一話者に限られており、個別に見れば、必ずしも世代全体で使用の底上げが生じているとは見なされないからである。これに関しては、当該の話者に類例の使用の可否を確認するほか、さらに多人数のデータを統計的に比較するなどして、実際の動きを追

跡していく必要がある。

3. 格助詞ドゴ

格助詞ドゴの使用については、以下の12の用法について、2節と同様の手法により調査した。主に前接名詞の有情性と特定性、後接動詞類の主体性(意思性)に着眼して使用の有無を聞いている。^{注6}

- ①有情物：太郎が花子を褒めた ②有情物：太郎が次郎を殴った ③有情物：窓から子どもが見えた ④有情物：私は虫が嫌いだ ⑤有情物：あの川で魚を釣った ⑥非情物：太郎が石を蹴飛ばした ⑦非情物：窓から海が見えた ⑧非情物：家の鍵をなくした ⑨無生物：玄関を掃除する ⑩非情物：アイスクリームを食べたい ⑪非情物：私は人混みが苦手だ ⑫非情物：部屋から声が聞こえる

以下、まずは図3において、言える(違和感がない)と回答した話者の各用法における実数を見てみる。

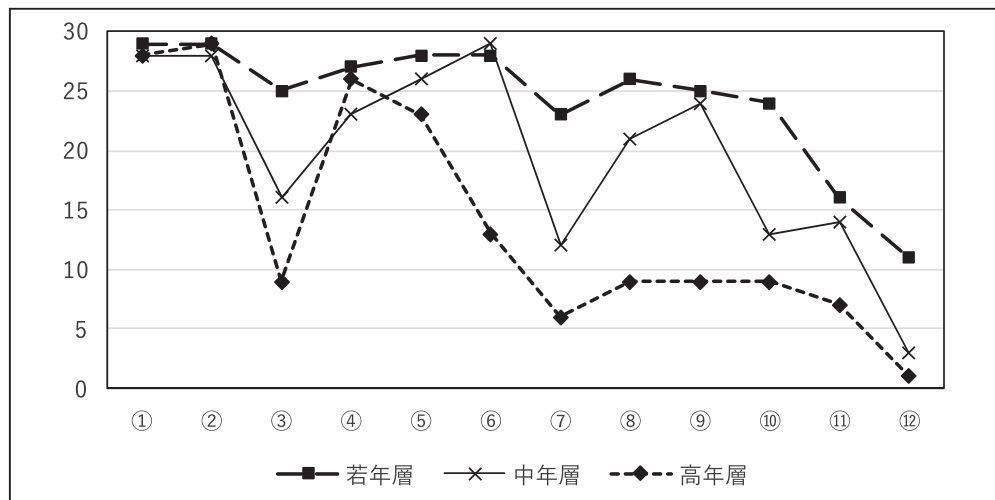


図3 格助詞ドゴの用法

すると、(③は特殊で少し扱いが異なるが)、おおよそ有情物目的語(①～⑤)と非情物目的語(⑥～⑫)で区別を明示的に示す高年層と、それがあまりはっきりしない若年層、そしてその中間的位置にある中年層との差が、各用法をまたがる形で明瞭である。また見方を変えれば、③を除く有情物目的語のすべてが、各世代でほぼ規則どおり、格助詞ドゴの使用を許容する傾向にある一方、⑥以降の非情物目的語では、特に高年層と若年層との間で実数の差が大きい。これにより、ドゴの使用に関わる有情・非情物の制約が世代を追って段階的に緩み、若年層

の多くは既にその区別を失っている状況にあることが大局的なこととしていえる。

しかし一方、区別が明示的であるとされる高年層においても、非情物目的語でのドゴの使用は皆無ではない。とりわけ⑥⑧⑨⑪などでは安定して30%前後がドゴを許容しており、この拡大が単に若い世代に独立して生じているものではないことを物語る。その点では、程度の差はあっても、当方言におけるドゴの用法の拡大は、大きくは全世代的な傾向であると要約できる。

また一方、上記で特殊であるとした③をはじめ、中年

層が特に⑥～⑫（非情物目的語）において凹凸の折れ線を示していること、また若年層のそれも必ずしも直線的には現れず、用例ごとに傾斜の様相を呈していることなどは、いずれも当方言の現状を捉えるうえで特筆すべき事柄である。これらによるならば、当方言においては、既述した“有情・非情物”という制約の枠組みを超えて、それとはまた異なるバイアスがドゴの使用に作用していることが想定できる。それが具体的にどのようなことなのか。以下には、図で傾向が見られる用法・用例に即して考えてみる。

まずひとつは、本来ドゴの使用を遮らない有情物を対象としながら、他のそれとは著しく使用率が異なる「窓から子どもが見えた（③）」である。図によれば、若年層でこそあまり差は見られないが、中年層、とりわけ老年層では折れ線の落ち込みが著しい。上記の原則に照らせばいかにも特異ということになるが、これについては複数話者が口を揃える次のような自己内省、つまりは

「子どもドゴ見えだ」はまったくだめだけれども、「子どもドゴ見だ（見だった）」であれば若干よくなるように思う。

との説明が、事実の正鵠を得ているであろう。日高水穂（2006）の調査結果からもうかがえるとおり、^{#7} おそらくドゴには、対象物である前接名詞に話し手がより主体性を持って積極的に関与する（そういう動作・知覚動詞である）ことを是とする側面があり、その点でいうと当例の場合、「見えた（＝自然に目に入ってきた）」に付随する主体性（意思性）の薄弱さが違和感を生み、ドゴの使用を躊躇させているのだと思われる。また加えて、当例における前接名詞「子ども」の不特定性も、その違和感を助長させていることが考えられる。日高水穂（2004）は、東北のコト・トコ類が前接名詞に不特定名詞をとりにくい性質を持つこと（玉懸元 2002 の報告による）、しかし秋田ではその条件下でもドゴの使用例が確認できることを述べているが、潜在的なところで（あるいは人ないし用例によっては）秋田で同様の性質がみとめられたとしても不思議ではない。なおそのことは、やはり複数話者からの次のような自己内省、つまりは

「次郎ドゴ見えだ」も適当だとは思わないが、「子どもドゴ見えだ」よりははるかにいいように感じる。

との説明が聞かれることからもうかがえる。つまり当該の③は、文例中で前接名詞の特定性と後接動詞の主体性の双方を欠くことにより、本来制約を受けない有情物目的語であっても、他とは一線を画する上記のような実態が帰納されることになっているものと解される。

なお、同じことは「窓から海が見えた（⑦）」に関してもいえる。③と同様、これもひとつは後接動詞「見えた」における主体性の欠如が違和感の原因であると思わ

れるが、加えて前接名詞「海」がそもそも非情物であることによって、ドゴの使用を阻むバイアスがより強固に働いたことが考えられる。全世代を通じて⑦が先の③以上に折れ線を急降下させているのはそのためであろう。

一方、同じ非情物目的語であっても、あるいは上記の③や⑦に指摘されるような事情によらなくても、⑩⑪⑫など、それ（③⑦）に準じて大きな下降幅を見せるものがある。このうちまず⑩に関しては、おそらくはその対象が「アイスクリーム」という新出の外来語であることが主な要因であろう。確認はしていないが、これがたとえば「その饅頭ドゴ食いで」のような例であれば、許容度が少しは上がるのではないか。それに対して⑪は、その非情物が「石」や「鍵」といった具体名詞とは異なり、ある状態を捉えた認識対象としての「人混み」であることが大きいと思われる。つまり当例の場合、自分の眼前にその事柄を具体物として対象化できるかどうか、ドゴを許容するひとつの選択指標があると考えられる。なおその点でいえば、⑫の「声」などは現実空間において形があるわけではなく、話し手が実際に眼にしたり触ったりすることができるものでもないことから、上記の基準からはもっとも縁遠い対象ということになる。図からもうかがえるように、当方言においては、「声」のような形のない抽象物に対しては、若年層も含め、未だドゴの使用が十分には浸透しない現状にあることがわかる。^{#8}

以上のように、格助詞ドゴの使用については、当方言本来の“有情・非情物”の制約を拡張して全世代的に、とりわけ若年層において用法の拡大が顕著である。しかしその一方で、前接名詞の特定性や後接動詞の主体性といったそれとはまた別の制約により、拡大幅に一定の段階差を示していることもまた事実である。今後はその段階差に当たるところをさらに密に見ることで、各制約の拡張の度合いを対比的に検討していくことが肝要である。

4. 可能表現

可能表現については、能力・状況可能による区別の有無、またそこに混同があるとすればどのようなものであるかを探るために、以下の8つの例文を用いて調査を行った。2節・3節と同様、例文における各表現形の使用または違和感の有無を聞くものであり、たとえば「書く（能力・肯定）」であれば、「書ゲル」と「書グニイ」の両形について、同じ条件下でそれが言える（違和感がない）かどうかの判断を尋ねている。

- ・能力・肯定：（この子はもう小学生なので）漢字を書くことができる <書ゲル>、（この子はもう小学

生なので) 本を読むことができる<読メル>

- ・能力・否定：(この子はまだ小さくて) 漢字を書くことができない<書ゲネ>，(この子はまだ小さくて) 本を読むことができない<読メネ>
 - ・状況・肯定：(今日は暇だから) 手紙を書くことができる<書グニイ>，(今日は暇だから) 本を読むことができる<読ムニイ>
 - ・状況・否定：(便箋が無くて) 手紙を書くことができない<書ガレネ>，(部屋が暗くて) 本を読むことができない<読マレネ>
- * < >内は当方言の使い分けの規則に基づく表現形

既述のとおり，秋田方言では元来，能力可能が肯定・否定ともに可能動詞形 (ex. 書ゲル・書ゲネ) に現れ，状況可能では肯定がスルニイ形 (ex. 書グニイ)，否

定が可能接辞形 (ex. 書ガレネ) に現れるのが一般的である。しかしその規則も，日高水穂編 (1999) などを見るとかなり曖昧化していることが予測できる。本来そのような変化を捉える場合，種々の活用動詞を揃えて対比的に見ることが有効であると考えられる。しかし予備調査段階^{注9}で話者が各場面をうまく呑み込めなかったり，類似項目の繰り返しで回答が惰性化することがあったため，本調査ではあまり深入りせず，まずは五段動詞の「書く」と「読む」の実態に限って見ることにした。以下には，そのうちの「書く」について，世代別の状況を図4～図6に分けて示す。^{注10}先述のとおり，「肯定・書ける」に関しては凡例の①②，「否定・書けない」に関しては同じく③④の使用の有無を聞き，図にはそれぞれ言える(違和感がない)と回答した話者の実数を示している。

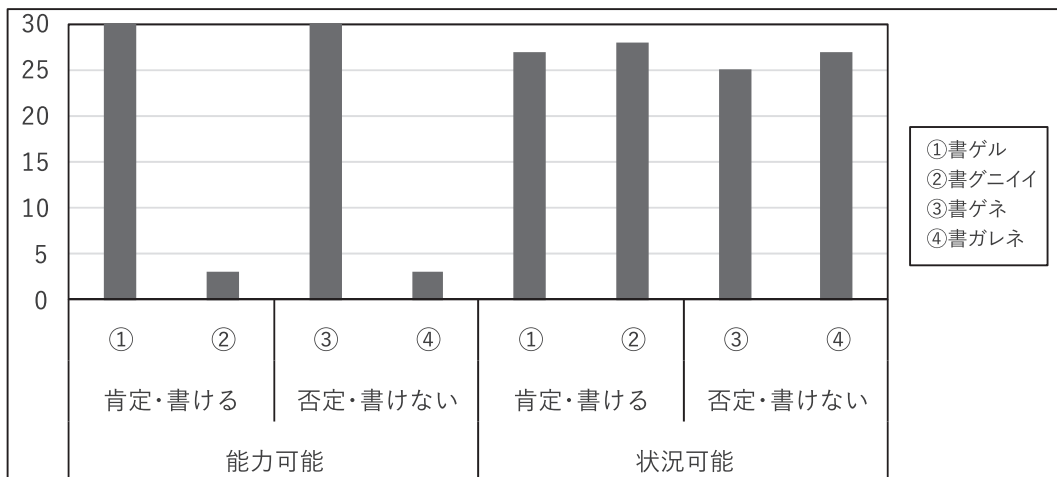


図4 可能表現：高年層

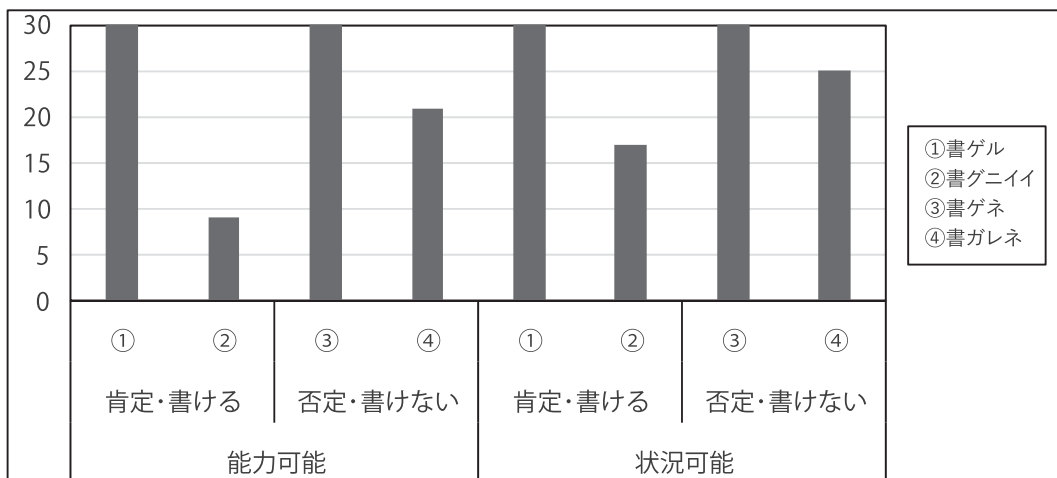


図5 可能表現：中年層

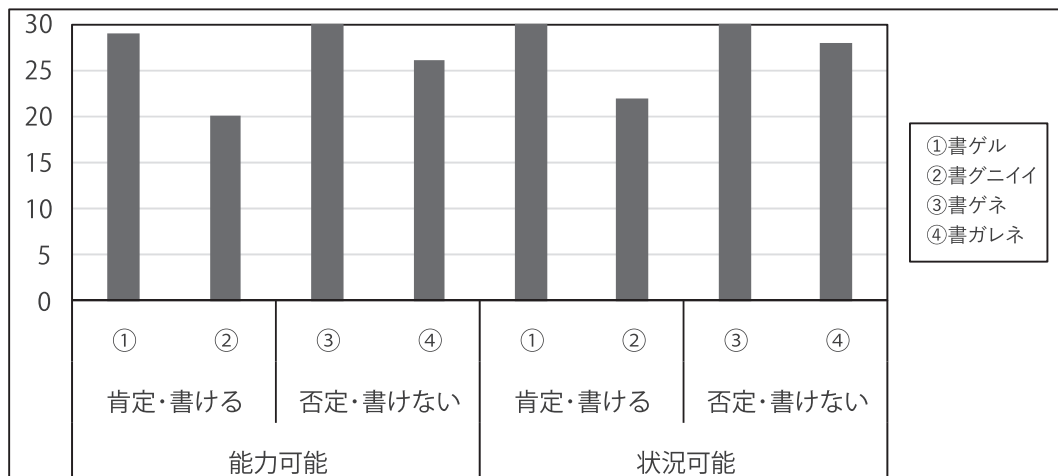


図6 可能表現：若年層

さて以上に抛りつつ、当方言の使い分けの規則をモデル化して把握するならば、能力可能の肯定・否定が図上の①・③（各領域の左方向）に、状況可能の肯定・否定が同じく②・④（同右方向）に分離して現れることが期待される。見方を変えれば、そこからの各棒線の崩れ具合が、当事象の混同や変化を段階的に示唆する目安になると考えられる。

すると、まず高年層（図4）では、能力可能の肯定・否定がまさに期待する①・③に現れ、逆に②・④がその規則に違反して併用されることがほとんどない。つまり当年層の能力可能に関しては、可能動詞形とそれ以外との間に厳然たる縦割りがあることがうかがえる。しかし他方、状況可能になると、もちろん本来の②・④も高い頻度で現れるが、それとほぼ同数の割合で①・③が現れ、能力可能のような厳しい縦割りの実態は影を潜めることとなっている。これによれば、当年層では状況可能的な表現（書グニイ・書ガレネ）の能力可能での使用は許されないながら、その逆はまったく規制されない現状にあることがわかる。つまり当年層においては、方言本来の使い分けの規則が能力可能の方で根強い一方、可能動詞形の状況可能への適用（それに伴う併用）は寛容であり、その汎用性が格段に広がりつつあることが特質であるといえる。

以上に対し、中年層（図5）になると少し様相が異なる。それは、ひとつは(a)能力可能において規則とは異なる②・④の台頭が見られること、またひとつは(b)状況可能において②・④の割合が逆に減り、主たる勢力が①・③へと取って代わられていることである。ここからわかるのは、まずは(a)高年層で規則的だった能力可能がいよいよ混同をきたし、もはや明確な使い分けの実態があるとは見がたい状況にさしかかっていることである。数的に見て、②（肯定・書グニイ）はまだ①へ

の紛れ込みを疑う余地があるかもしれないが、④（否定・書ガレネ）は核心的に③との併用を許容する段階にあると見るべきであろう。使い分けの要であり砦でもあった能力可能がこのような状況であることにより、可能表現全体の体系性は以後大きく転換していくことが必至である。なおそれと関連してもうひとつわかるのは、(b)可能動詞形の状況可能への適用が高年層に引き続いて（それ以上に）浸透・徹底していること、結果、能力・状況可能（肯定・否定）のすべてで可能動詞形が許容され、それがむしろ可能表現全体の基本形となっていることである。これにより、(a)で予測した体系性の転換は、果せるかなそのとおりであり、中年層はまさにその過渡的段階にあるということがいえる。

なお若年層（図6）については、一見すると上記の動きがさらに徹底した状況であるかのようにも見える。特に可能動詞形が可能表現全体を隈なく覆う様は、日高水穂編（1999）も指摘する「可能動詞一本化」への道をたどりつつある（p.42）ことを想像させるものともいえる。しかしここで注意されるのが、その可能動詞形の拡張とともに、当年層では状況可能的な②・④（書グニイ・書ガレネ）の拡張も相応に見られ、前者と同じように可能表現全体を覆うかの動きを見せていることである。^{注11}これによれば、若年層が①・③と②・④による違いを分別し、そうである必然を認識してこれらを回答しているものとは見なしがたい。おそらく若年層の各話者は、上位年層からの見聞などにもより、当方言に②・④の表現形があることは知っているが、上記のような使い分けの認識は薄く、単に両形ありうることを知識として回答しているに過ぎないものと受け取れる。その意味では、可能動詞が可能表現の体系性や合理性に従って一本化しつつあるというよりは、能力・状況可能による使い分けの規則が崩れ、その文法的役割が無形化する中で、

各表現形（とりわけ②・④）だけが規則とは無関係に取り残された状況であると解すべきもののように思われる。

以上を総合すると、当方言の可能表現は、まず高年層で可能動詞形の状況可能への適用が見られ、部分的な規則違反が生じている一方、中年層では逆に能力可能の混同が過渡的に進行、体系全体が曖昧化する中、若年層となってそれらのほぼすべてが無規則化した（ただし表現形だけは形骸化して残っている）状況にあるとまとめられる。

5. 成果と課題

本稿では、用法の拡大・変容が指摘されている秋田方言の格助詞サ・ドゴ、可能表現について、観点に即した用例の使用または違和感を聞くことで、その現状を世代別に明らかにすることを目的とした。各現象においてどのような制約の拡張があり、それを許容する範囲や序列がどのようになっているのか。そうした方言文法で今実際に生じている変容の姿を、高・中・若年層の比較を通して動的に捉えようとした点に、本稿の特質があると考えられる。特に拡大の傾向の中にも既に定着しているものと、世代的に過渡や萌芽の状況を示すものとの差があること、逆に先行報告との対照にもより、用法の拡大を阻む要素もいくつかあることが明らかになった点は、大きな成果であったといえる。

しかし一方、上記のことは大きくは用法の拡大と統括できるかもしれないが、その最大値を示す若年層の多くが「(自分は言わないが) 言われて違和感はない」と回答していることには注意を要する。一般に言葉(=方言)は、それが話される状況があつてはじめて人の意識に上るものであろう。本調査における若年層もまた、そういう環境に身を置くことによって当該の語を知り、意味や用法が認識され、その過程で派生・拡大もしたのであろうことが推測できる。そのような世代がこれ以降、「自分は言わない」という体で用法の拡大を許容していったとして、果たしてその先にある文法現象というのはどのようなものだろうか。既述したような、若い世代で「用法の拡大が顕著」であるとか「文法化の動きがさらに加速していく」とかといったことが、そう簡単に推認しうるものなのかどうか。方言文法の世代的な動きを捉えるうえで、そうした側面は今後、より注視して見ていかなければならないことのように思う。

また本稿では、現象の拡大や、逆にそれを阻む要素があることを帰納法的に把握したが、その帰納されたことに着目して類例を揃え、それぞれの蓋然性を検証する作業が今後は必要になると思われる。加えて異なる接続形

態や活用動詞などを用例ごとに揃え、現象をより体系化して見ていくことも必要となるだろう。ともに発展的な課題として、これ以降に行う追跡調査の中で取り上げることにしたい。

【注】

1. 秋田大学地域文化学科のコアカリキュラムであり、学科所属の学生が3年次に履修する。筆者の担当する講座(「秋田方言の調査研究」)の調査には、2016・2018年度に各6名が参加した。授業の趣旨や内容については大橋純一(2017)を参照。
2. 「特定地域研究ゼミ」(2018年度)の受講生であり、かつ自分自身が秋田県出身である学生4名には、本調査の趣旨を理解していない段階(初回授業)で、自己内省により回答を記録してもらった形をとった。
3. 日高水穂編(1999)は、秋田方言の格助詞サの調査データ(その用法が自然か不自然か)をサの使用者と非使用者とに分けて集計したうえで、両タイプの許容回答率にはほとんど差がないこと、よって「[サ]を使わないと意識している者であっても、「サ」の用法について、「使用者」とほぼ同様の内省が可能である」(p.36)ことを確認している。
4. 「(自分は言わないが)、言われて違和感がない」の話者もカウントしていることからすれば、正確には「許容する」などというべきであろうが、本稿では以下そうした話者も含めて「使用する」、また他にも「使用」「使用者」「利用率」のように統一していうことにする。
5. 日高水穂編(1999)には、たとえば「[変化]の意味を明確に示す動詞「変わる」「決まる」などが用いられている調査文・・・では許容回答率が高い」(p.37)、「変化の前後が想定しやすいものは、許容回答率が高い」(p.37)などの記述がある。
6. これについては、調査票作成時に先行報告およびゼミ受講生(秋田県出身)の内省をもとに方言の使用を左右しそうな要素を整理し、予備調査を行ったうえで、観点としたものである。
7. 日高水穂(2006)は、各調査文に対する若・中・高年層の回答パターンを整理したうえで、格助詞ドゴの使用に関する拡大～縮小の変化プロセスを7段階に分けて追跡している。それによると、「物理的働きかけの強い動作」を主たる条件として拡大が進展し、それが最大(すべての調査文を「言う」と回答する段階)に達すると、今度は「無意志的な知覚動作」に関するものから縮小に転じていることがうかがえる。つまりこの拡大と縮小に連関する要素は、本論でいう対象への主体的な関与や意思性ということと相似する現象であるといえる。なお上記のとおり、日高水穂(2006)は縮小の過程も視野に入れつつ、特に若年層が共通語化によってドゴの機能を狭めていることに言及している(その点、本調査の若年層が拡大の一途を示すのとは実態が異なる)が、これは、日高水穂(2006)が各調査文について「[言う]かどうか問うもの」(p.207)であるのに対し、本調査が「言える・言われて違和感がない」かどうかを問題にしていることからくる

相違だと考えられる。

8. ⑫に関しては、それとともに、後接動詞の「聞こえる(=自然に耳に入ってくる)」が③⑦の例でいう“主体性の欠如”に当たることが一因であると考えられる。
9. 調査項目の検討段階で、各世代1～3名を対象とする予備調査を行った。その結果は本調査の分析データには加えていない。
10. 「書く」と「読む」とで実態に大きな差は見られなかった。
11. もっともこれには、(注7にも記したが)、本調査が各表現形の使用または違和感の有無を聞いている(日高水穂編1999が実際に言うものを選んでもらっている)という調査法上の違いがあると考えられる。つまり日高水穂編(1999)が「形式自体(筆者注・スルニイイ形)の使用率は高いものではなく」(p.42)といている段階から本調査で飛躍的に拡張が進んだものとは簡単には見なされない。実際、当年層における②・④の回答の多くは、「(自分は言わないが)言われて違和感はない」とするものである。

参考文献

- 秋田県教育委員会編(2000)『秋田のことば』無明舎出版
- 大橋純一(2018)「生活空間に見られる方言使用の実態—秋田方言の内向け・外向けの実態と意識—」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』73
- 国立国語研究所編(1989)『方言文法全国地図1』財務省印刷局
- 小林隆(1995)「東北方言における格助詞「サ」の分布と歴史」『東北大学文学部研究年報』44
- 小林隆(1997)「周圏分布の東西差—方向を表す「サ」の類について—」『国語学』188
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と展開」『大阪大学文学部紀要』第33巻 第1分冊
- 玉懸元(2002)「仙台市方言における格助詞相当形式「ドゴ」の用法」『国語学会2002年秋季大会予稿集』
- 日高水穂編(1999)『秋田大学ことばの調査』第1集
- 日高水穂(2004)「格助詞相当形式コト・トコ類の文法化の地域差」『社会言語科学』7-1
- 日高水穂(2005)「方言における文法化—東北方言の文法化の地域差をめぐって—」『日本語の研究』1-3
- 日高水穂(2006)「文法化」小林隆編『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店
- 北条忠雄(1961)「方言の実態と共通語化の問題点 秋田」東条操監修『方言学講座 第二巻 東部方言』東京堂

